

18. 学習材

これまで学習内容が定まっている教科学習においては、『教材』という言葉が使われてきました。しかし、「自立への基礎を養う」ことを究極的なねらいとし、内容を活動の大枠としてとらえる「生活科」においては、むしろ『学習材』という言葉を使います。また、「学び方やものの考え方を身に付けたり、自己の生き方を考えたりする」ことをねらいとして創設される「総合的な学習の時間」においても使われていくと考えられます。

学習材とは

学習内容の習得を目的に用意される『教材』と違って、『学習材』は、子供の身近にあって、何度も繰り返しかわることのできるものであり、子供が主体的に活動を進めるために必要な素材のことである。

また、あらかじめどのような価値があるのか分析し、子供の活動を想定しながら教師が選択していく『教材』に対して、『学習材』の価値は、具体的な活動の中で、子供がかかわることによって初めて生まれるものである。さらに、その価値は、子供の実態や活動の状況によって異なってくるものである。

したがって、子供の興味・関心によるところが大きく、教師は、子供を取り巻く身近な環境（学校や家庭・地域等）がどのようになっているのか、子供は、それにどのようにかかわっているのかなどをふだんから把握しておく必要がある。

実践から

校区を探検する活動を考えてみます。子供たちは、学校を飛び出し、身近な環境である『地域』にかかわっていきます。事前に「何を調べてくるのか」ということを決めてから活動をはめることが多いのですが、実際に活動を進めていくと、おもしろそうな店があって中をのぞいたり、お店の人にインタビューしたりするといった活動が生まれることもあります。

子供たちが、この探検する活動でかわった対象は、子供たちが選択したものであり、学習材ということができます。すなわち、当初想定していなかったお店などのように、活動を進めていく中で出てくるものもあります。